

中国遼寧満族譜書簡介

張 德玉・蔡 雅文・呂 慧娟 著

後藤 智子 翻訳

本稿掲載の経緯

1999年8月20日から26日までの1週間、神田信夫先生や中見立夫、加藤直人、柳澤明氏それに王禹浪氏と共に瀋陽へ赴き遼寧省檔案館や遼寧省博物館を訪れた。その間、今では車を頼めば1日で往復できるようになった後金國発祥の地である新賓満族自治県に出向き、永陵およびヘトアラ城（老城）を再訪した。瀋陽に帰った後、永陵で入手した傅波・張徳玉・趙維和著『満族家譜研究』（1996年、遼寧古籍出版社）に、尚可喜の家譜である「尚氏宗譜」が『沙格達哈拉譜書（古い姓の家譜）』として紹介されていることに気付いた。おりよく連絡のあった遼寧省民族委員会古籍整理處馬協弟氏に尋ねたところ、編纂者と連絡をとて下さったうえ「複写が新賓県にあり出向けば見せてもらえるであろう。私が同行しても良い」との返事であった。

8月25日早朝、馬氏と王氏の3人で再び新賓に赴いた。広場に巨大なヌルハチの銅像が建つ新賓人民政府の一郭にある新賓檔案館では、『満族家譜研究』の編纂者である趙維和氏が待っていた。趙氏は既に檔案館を退職したことであったが、編集室の戸棚には氏の収集した満族家譜の複写が多数列べられていた。はじめに目的の「沙格達哈拉譜書」の複写を見せてもらったが、宗譜の文中に“sakda hala”という満文があるのではなく、漢字で「沙格達哈拉」とあるのみであった。この宗譜は、宗譜の所持者である永陵鎮居住の尚可喜の第32子尚之玲の末裔が、康徳6（民国28）1939年「尚氏宗譜」に依拠し、その後の自分の系譜を書き記したものであろうが、「本姓（満族姓）は老であり、官姓は尚」であると、沙格達ハラと名乗るのは満族姓であると記している。

趙氏は檔案袋に納められている宗譜を次々に取り出して見せてくださったが、短時間ではとても記録しきれるものではない。そこで趙氏に宗譜を収集した経過や宗譜がどのように保存されていたのかなど宗譜収集の話を寄稿して頂けないかとお願いした結果、お送りいただいたのが張徳玉・蔡雅文・呂慧娟著の本稿である。趙氏によれば収集した宗譜は百種類数十姓に及ぶのでその一部を記すにとどまるのことである。ここに記された宗譜はいわば有名人の宗譜であり、この一部は前記『家譜研究』や趙立靜・何溥溼・傅波主編『満族家譜選』（1994年、科学出版社）、李林『満族家譜選編』（1988年、遼寧民族出版社）などで既に紹介されているものもある。

なお、趙氏の話では家譜の整理と編纂に従事した人々で満文を解読しうる人は少なかったとのことあり、満文タイトルの宗譜は未整理のようである。すなわち、「喜他拉氏家譜」の表紙には“hitala hala/ nenecu omolo/ booi durugan”と記されているが、これを収めた『満族家譜選』には何も記載はない。そのほか“daicing gurun i abkai wehiyehe i gūsin jakūn aniya aniya biyai orin uyin de da mafa urse gebu be ilibuha（大清乾隆38年正月29日に始祖らが宗譜を編纂した）”と書かれている宗譜等は未整理のままのようである。

（細谷 良夫）

『福陵覺爾察氏譜書』

初修は乾隆4年であり、嘉慶14年の捺印がある。木箱に収められ、箱の正面に譜書名が刻まれている。上下2巻に分かれ、ともに藍布の表装に紅紙の題簽が付いている。体裁は整っており、保存状態は良好である。その序によれば趙氏が「佛阿拉覺爾察地方」に居住したことになんて「地を以て氏と為」し、清の入関後、覺爾察氏は代々福陵を守る官員となった。「奏章原案」で

は比較的詳細に氏族源流、遷徙、分枝、姓氏源流と変遷を辿っている。中でも清太祖ヌルハチの命で修築した後金国の首府ヘトアラ城の具体的な築城状況を詳細に記述している。またその祖、班布理がマルドンの戦いでヌルハチの命を助けた過程と世襲陵戸となった原因等も詳細に記述している。

『永陵喜塔臘氏譜書』

譜書は2枚の薄い板をつなぎ合わせたものに挟まれており、木板の中央に篆字で書名が陰刻されている。また別に譜单があり、第1世から第10世までを記し、重要人物には脚注を附し、満文で「喜塔臘哈拉男孫（的）家譜」と記されている。譜書そのものには譜单の第10世から第18世までを記す。主な内容は、氏族源流、分派、姓氏源流と変遷、人物伝記等である。特に譜单中の重要人物に附せられた「圖注」は、喜塔臘氏（漢姓図姓）と建州右衛都督王杲（阿古）の関係等の研究に貴重な史料を提供している。

『那拉氏宗譜』

この譜書は氏族始祖である納齊布をフルン四部中のウラ部酋長とし、自らをウラ部直系の後裔としている。譜衣の脱落のため修譜年代は不明。譜書は2つの部分に分かれ、譜序と世系等はともに手抄である。世系には始祖納齊布から第17世までを記す。譜書は、氏族源流、姓氏命名の由来と変遷、遷徙と分枝、重要人物の事績等を記載している。特にウラ部とハダ部の血縁関係、ウラ部とハダ部や建州女真との対立と戦争、通婚関係の詳細な経過、及びフルン四部の名称の変遷とブジャンタイが建州に降り、後に叛いた内情等の記述は非常に詳細である。

『索綽羅氏譜書』

『索綽羅氏宗譜』『索綽羅氏族譜』『索綽羅氏譜書統宗』の3部に分かれる。ともに手抄本と鉛印本からなる。体裁は完備しており、保存状態は良好である。主な内容は族源、姓氏の変遷、遷徙、世系、人物、墓所、祖宗の位牌を安置する方位に関する規定、祭祀に用いるべき器具、祭祀儀礼、節日儀礼、喪葬儀礼及び漢文化を吸收した五服図説等である。満漢文化交流研究に貴重な史料を提供している。

『満洲蘇完瓜爾佳氏全族宗譜』

譜書は手抄本、1915年に抄写された。原譜は1942年に戦火で消失した。譜書によると、始祖王扎拉達が代々、松阿里烏喇達林蘇完の沃野の阿拉哈哈達に居住していたことにより、蘇完人氏となつた。後に、兄弟3人が3箇所に分居し、本支の始祖王扎拉達は珠察の後裔で、第6世ソルゴの代に蘇完部長となつた。その次子フィヨンドンはヌルハチの五大臣の1人である。本氏族の源流、遷徙、“從龍”，姓氏、人物等の記載が非常に詳細である。

『馬佳氏譜書』

馬氏は山西太原府太鼓県馬家村に原居した氏族である。後金軍が山西を攻掠した時、捕らわれて盛京に至った。雍正8年に旗籍に入り、盛京戸部に投入されて莊缺を得て、官地を承領し、ついに代々莊頭となるに至った。譜書はこの事情について詳細に記述している。

『尚氏宗譜』

尚氏は清初の平南王尚可喜の後裔である。譜書は尚生を始祖とし、尚可喜を第4代としている。尚可喜は33人の子を持ったが、1子を他家に養子に出した。残り32子（房）の後裔に関する譜書の記載は明確でよく整理されている。尚可喜を中心に上は3代遡り、下は32子の分派世系に及んでいる。譜書は尚可喜自身により編纂が開始され、後に4度の続修を経た。康熙14年の初纂は尚可喜の手でなされ、彼自ら序文を記した。主な内容は、先王実績（清廷冊封等を含む）、源流宗支總図、世系封贈並附宗支図、恩綸錄（3部）、始過関東、衡水派図、先王遺囑、先王定訓、重修家譜序（2篇）、関東尚氏世系、尚氏門中三代永遠譜書伝留後世、興京倉立字拾陸箇、尚可喜之三十二房新賓支派世系等である。自序で尚可喜はその叛明降清の思想動機及び原因等についてはっきりと記しているが、従来の明清史文献に記載されている事実と大いに異なっており、その史料的価値は非常に高いと言える。

『專図呢嗎察氏族譜』

上下2冊の他、白紙1冊あり。体裁は整っており、世系は明確である。呢嗎察氏の祖源と姓氏の変遷に関する記載は詳細である。

『富察氏譜書』

主な内容は、原序、続序、世系、満洲族祭祀儀注本等である。富察氏は元々長白山の八道溝の一つ葉赫溝の嘉理庫城に居住していたが、三世祖が初めて地名から姓氏を葉赫富察氏とした。明末に建州老營ヘトアラ地方に遷徙し、順治帝にしたがい入関した。後に故郷に戻り新賓駐防となつた。本氏族の起源と遷徙変遷などの記載は詳細で、特に満族祭祀の由来とその祭祀過程の記載は十分注目に値する。その内容には内祭、外祭、内祭祭祖、外祭祭天（即ち索羅杆子を祭ること）地、祭祀過程におけるあらゆる祭祀の準備、器皿、儀礼等がある。

『張氏宗譜』

清朝の興起のとき、張氏の始祖が清朝に投じて後に旗籍に入り、清世祖のとき、入関し、漢軍正黃旗に編入され、順治8年選ばれて盛京駐防となり、漢軍鑲紅旗第2佐領に隸属し、遼陽に駐防した。族中の各人の身分、事績、生葬、妻の姓、出身地等について要領よく説明している。

『高氏宗親譜冊・高氏宗譜』

高氏は元来雲南に居住し、耕読を業としていた。明末に戦乱を避けて山東省蓬萊県高家莊に遷徙し、順治年間に海を渡って盛京に移り、遼陽高家嶺に居住した。康熙22年に盛京漢軍鑲白旗第3佐領に入り、紅冊地数十頃を開拓した。高氏は旗人の身分で披甲として働き、糧餉を得ていた。後に盛京戸司行走に陞任し、これ以後高氏の族人は代々官位につくようになった。高氏の族源、遷徙の原因と過程、及び遼陽地区における農地の開墾、旗籍に入った原因等、いずれも詳細に記載している。

『白氏源流宗譜』

主な内容は、序言、遷徙、世系、重要成員の伝記と家族の大事迹等である。また、白氏祭祖、祭天地の規定、氏族錢糧の支出の規定、土地房屋の典売、祖陵の沿革等の記載は詳細である。

『那氏族譜』

葉赫那拉氏のもので、主な内容は、叙言、序言、世系、羊公墓表、老墳図、大祭で用いる器物図、祭祖礼儀、節日礼儀、孝順範例等である。始祖奇瑪瑚の時に皇帝にしたがい入関し、満洲正藍旗に隸属した。特に祭祀儀礼における領牲、儀節、祭祖、祭天地、換鎖線等に関して詳細に記している。また器物図が描かれているが、これは我々満族各氏風俗の差異を研究する者に貴重な史料である。

『瓜爾佳氏譜書』

これは現存する満族譜書中最多の譜書である。内容は序言、世系、祭祀儀礼、墳図、家訓、氏族源流、遷徙、分派、冠姓、人物等である。

『薩嘛喇氏族譜』

主な内容は、譜序、墳図、例言、世系、各派住址略表及び存疑等である。本氏は康熙年間に北京から鳳凰城へ派遣され、当地で人口が増大し、兵丁数も増加し、鳳凰城を開発した主要な大姓の一つとなった。各支の分布の記載は詳細である。

『吳氏譜書』

始修は康熙20年であり、以後幾度も増補された。主な内容は、序言、牌位、康熙丙戌科進士題名録、仕官、捐納監單、会試硃筆、御試詩文、御試恭記、吳宗阿撰書碑文（満文）、詩、哀矜錄、呈狀、潘氏總論（満漢文対照）等がある。吳氏の始祖はもともと英額に居住し、清太祖の時にたびたび戦功を立て、二世祖の時に義勇將軍に奉ぜられた。三世祖のなかの伯祖が正白旗に入った。叔祖は鑲藍旗に入って、公主に従ってホルチンに移住した。吳宗阿の祖父は皇帝に従って入関し、

後に鑲白旗裕親王府に隸属した。吳宗阿は官員の家に生まれ、進士に及第した後、候補主事となり、京職に選せられるのを待つ間、王命を受けて王子の教育にあたった。後に誣告されて獄に下った。幾度もの審理を経てついに無罪を宣告されたが、迫られて康熙51年に遼寧に移住した。譜書は吳宗阿の冤案と数度にわたる審理について詳細に記述している。

『章佳氏族譜』

主な内容は、氏族源流、人物事績、世系、墳墓分布、墓参規則、重修譜序等がある。章佳氏の祖先は長白山鄂磨合索洛（索洛、すなわち伙洛のこと）処に居住し、明末に蘇子河下流のマルトン等の地方に移住した。譜書では、三世祖羅塔の2人の娘、哲因格格と詹泰格格が太祖皇帝（ヌルハチ）に嫁ぎ、「正宮皇后」となったことを特記している。史料には寵愛を争い権力を弄して内部で抗争してヌルハチの命で斬られた2人の妃を記載するが、これが章佳氏の二妃であろう。後世の史書はどれも章佳二妃を記載していないが、庶妃中に見られる兆佳氏がおそらくこれに比定されると思われる。ヌルハチがマルトン寨を攻撃し、章佳氏の兄である納木占、薩木占を殺した際、納申、完濟漢はジャイフィヤンへ逃亡した。章佳氏には入京後、官位に就き、爵位を授与された者が非常に多く、康熙40年には旨を奉じて鳳凰城に移駐した。

『王氏族譜』

主な内容は、序、例義、世系、世伝、譜訓、碑文等がある。王氏は元々山東省蓬萊に居住し、明末清初に一族を挙げて遼寧省遼陽城の東にある磨石峪に移住し、康熙年間に“受田入冊”し、満洲鑲紅旗第1佐領に隸属した。世系譜は順治初から咸豐年間まで8世200余年を記す。譜中の「世伝」には氏族中の徳行高尚なる者の事績を載せ、「外伝」には本族外姓の人の事績を、また「譜訓」には他家の譜書を収集し、族人の閲覧に供した。また祭田とその管理、祭祀程序等が記されている。譜中に見られる「追乘胞兄玉麟公九品職銜告墓文」は死者のための捐納を記したもので、これは各氏の族譜中には稀である。捐納の盛行とそれに対する当時の人々の考え方への影響を反映している。

『趙氏譜書』

趙氏は満洲鑲藍旗馬魯佐領下の人である。康熙26年に北京から奉天府（瀋陽）へ移住させられ、復州鑲藍旗界に居住した。趙氏の祭祀で使用される器物、祭祖の手順等の習俗が詳細に記されている。中でも祭祖供卓における器具の配置方法の図解はその他の満族譜書には見られないものである。

『李氏譜系』

この譜書は明末に遼東の名将、寧遠伯李総兵成梁の族譜である。主な内容は、序、附記、前三

世図系，老長房至老五房図系，世次原始，老長房至老五房正文，宗族輩序一覧等がある。譜書の編纂は康熙61年に開始された。

『佟佳氏族譜』

体裁は整っている。始祖は元末明初の潼関総兵まで遡ることができる。明中期に明が朝鮮兵と共に李満住を攻撃した時，佟佳江に居住していた佟氏の何人かの者が山林に逃亡し，盛京地方にまで逃げた。後に，撫順馬市に入って貿易に携わり，そのまま撫順に居住して当地の豪商となった。ヌルハチの挙兵前，佟氏は娘の哈哈納扎清を妻として与え，挙兵後は十三副半の鎧甲をヌルハチに与え，その成功を助けた。また経済戦略上においても多大な功績を挙げた。譜書は佟氏の族源，姓氏の変遷，遷徙した分派，明末清初の貢献，人物，碑石の軼文等についてきわめて詳細に記している。特にヌルハチの挙兵前後，数十年の事績にまつわる記載は，清初史の研究において価値の高いものといえる。

以上見てきたことから明らかなように，満族譜牒文化は大いに研究の余地があり，族譜の地位・価値を軽視することはできない。漢文化に起源を持つ満族譜牒文化は，満族文化の淵源と発展を研究するための重要な史料である。

(中国遼寧省新賓満族自治県在住)